


在外研究員研究報告書

2019年 11月 29日 受付

所 属	社会学部		氏 名	小黒 純	
職 名	教授				
研究課題名	調査ジャーナリズムに関する研究				
研究期間	2018年3月25日～2019年3月24日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	同上	カナダ・トロント	ライアソン大学		
研 究 費	306.6 万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発    表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日	
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
	演 題	講演学会名		講演年月日	
	Current situations and challenges of graduate and undergraduate journalism education at universities in Japan -Focus on hands-on learning model of investigative journalism	5th World Journalism Education Congress (WJEC) (フランス、パリ) (開催期間：2019年7月9日～11日)		2019年7月10日	

2019年11月29日

社会学部メディア学科

教授 黒 純



## 在外研究員研究報告書

### 研究成果の概要

下記の通りご報告いたします。

#### 1 研究テーマ

##### (1) 研究テーマ

「調査ジャーナリズムに関する研究」

##### (2) 研究テーマの展開と背景

申請時から、カナダのジャーナリズム、とりわけ「調査ジャーナリズム」に焦点を当てた研究を進め、完結させようと考えていた。その後、受け入れ先であるライアソン大学が、カナダ国内でも屈指のジャーナリズム教育を行っている面に注目し、現地に足を踏み入れることの優位性を強く意識するようになった。そして次第に、カナダで行われている最先端のジャーナリズム教育の実態を、参与観察を通して、しっかりとつかむことが極めて重要であると考えられるようになった。つまり、調査ジャーナリズムを含め、ジャーナリズムに関する教育がいかに行われているかを十分に調査する。そして、カナダ国内トップの大学における教育プログラムを踏まえたうえで、それをいかに日本国内の教育、とりわけ所属する本学社会学部（メディア学科）の教育に反映できるかを考える。こうした「現地に学ぶ」ことこそ、在外研究の機会を最大限に活かす道であるという確信に至った。

小職を1年間にわたって受け入れたライアソン大学の Ryerson School of Journalism (RSJ) は組織を挙げて、小職の意向に理解を示し、全面的に協力を確約していただいた。Janice Neil 学部長はもちろんのこと、指導教授となつていただいた Gene Allen 教授をはじめ、専任教員全員に温かく受け入れていただいたことは、感謝しても仕切れないほどである。

#### 2 研究の実際

##### (1) 2018年4月～8月

RSJ はジャーナリストの育成を主たる教育目的にしている。大学院でもなお、ジャーナリスト教育が中心だと言ってよいだろう。教育に当たるスタッフもすべてマスメディア企

業での勤務経験があり、ジャーナリストとして活躍していた（あるいは、今も活躍している）者だけで構成されている。非常勤のスタッフも、全員がジャーナリスト経験がある。例えば、Angela Misri さんは非常勤の立場で、1年生向けの必修科目を受け持っているが、現役のライターでもあり、次々と作品を発表している。

こうした、マスメディア経験者やジャーナリストを迎え、洗練された超実践的な教育プログラムが行われている。それがRSJの成り立ちであると言える。こうした教育プログラムの全般を、春学期がほぼ終わった2018年5月ごろから8月ごろまで、情報収集しつつ俯瞰した。具体的には、RSJ設立当初からの歴史、そして、教育プログラムの変遷を見つつ、個別の科目についての情報収集に努めた。しかしながら、RSJの場合、6月～8月はいわゆるサマースクールもほぼ組まれておらず、キャンパス全体が長期の夏季休暇に入った状態になったことも付言しておく。これもまたカナダの文化であり、現地の人々が共有する「季節」の過ごし方を学ぶことができた。そうこうしながら、9月からの秋学期に備えていた。

## (2) 2018年9月～2019年3月

2018-2019年度の新学年が始まるのが9月で、授業が一気に本格化した。上述したような情報収集を終えていたので、各授業の参与観察は比較的スムーズに始まった。定点観察したのは、1年生向けの必修科目と、2年生向けの必修科目、それに大学院の専門科目など、複数の科目について、実際に講義やワークショップが行われるところに参加し、どのように授業が展開されているかを観察し続けた。

一例を挙げると、Adrian Ma 准教授の「News Production」では、ケーススタディとして、鉄道事故を想定し、受講生が取材と記事の編集に当たるという一種のトレーニングを行う回があった。決められた時間になると、受講生はパスワードを伝えられて、仮想のケース問題を始める。当初流れてくる情報は限られている。「数十人が重軽傷」。情報は錯綜する。警察と消防の情報が食い違う。それでも何らかの第一報を書き、時間内に送信することが求められる。1回目の締め切りを過ぎると、また新たな情報が飛び込んでくる。けが人の状況がより具体的になり、さらに具体的な数字が流れてくる。受講生は第一報を差し替え、新たな情報を加え、ニュース価値を見定め、続報の記事を書く。これもまた、締め切りを守らなければならない。新たに鉄道会社の記者会見が映像で流れてくる。広報担当者のコメントを入れ、記事を差し替える。そして、2回目の締め切りが過ぎた後、事態は大きく動く。警察の発表で、事故は列車運転手の飲酒が原因だったというのである。それまでは、多数のけが人を出した列車事故という位置づけだったが、第3報以降は、飲酒運転が原因の人災だったことへニュースの中心が移行する。

このクラスを担当する、Ma 准教授も公共放送 CBC など実際に、事件事故の取材経験がある。ジャーナリズムの現場で起こる取材と編集の様子に、限りなく近い練習問題を創作し、受講生に極めて実践的なトレーニングを課している。先に超実践的なプログラムだと

述べたのは、こうした授業が毎日、どこかのクラスで当たり前のように行われているからである。

こうした授業内容は、受講生の成績評価とも連動している。すなわち、試験もまた同じような形式で行われる。何かの出来事が進展し、それに応じて、締め切りに間に合うように、受講生は取材した内容を、初報から続報へとニュースを制作していく。記事の書き方や、用字用語のルールに則っていれば評価は高いし、逆に固有名詞の間違いや、スタイルに則った書き方でなければ減点対象となる。締め切りに間に合わないのも、大きな減点対象となる。

一人ひとりの受講生のケアも行き届いていた。特に、一定水準に達したニュース記事を書けない受講生は居残らせ、担当教員が問題点をていねいに指摘する。記事は時間を掛けて添削されたものが返却される。どこにどのように問題があったのか、事前に示された、細分化された評価マトリックスに当てはめて、評価がなされる。端的に言えば、上手に記事が書けたかどうか、それ自体が成績となる。

Ma 准教授の授業を例に挙げたが、このような実践的な方式でジャーナリストを養成しようとする科目群が、RSJ の教育プログラムを構成している。そのいくつかを定点観察し、プログラムの内容、および代表的な科目について、クラスの中でどのように展開しているのかを把握することが、研究の日課となっていた。

こうした中で、「調査ジャーナリズム」は、取材経験があるジャーナリストが担い手となるものの、学部教育の中でも組み込まれていた。選択科目という位置づけで、単なるトレーニングではなく、ホームレス問題や、環境問題などの社会問題について実際に取材し、編集作業を行う。その成果は学内で週1回のペースで発行されている学生新聞 Ryersonian の紙媒体（タブロイド判）とウェブサイトに掲載されるだけでなく、時には地元紙 Toronto Star などの大手メディアに掲載されることもある。

Ryersonian には、選択科目「調査ジャーナリズム」を受講する学生の書く記事だけが掲載されるわけではない。小職は編集局の様子も、定期的に観察する機会を得た。編集長の Peter Bakogeroge 氏は、編集部員として登録した学生を指導して、この新聞を週1回、確実に発行するのが仕事だ。「調査ジャーナリズム」のように、授業の一部として扱う科目もある。編集会議も毎日開かれ、記者活動をする学生と話し合い、特集ページを企画するほか、紙面割りをして、担当する記事と記者を割り振る。締め切りが近づくと、記事を書き終えていない学生たちが入り乱れ、修羅場と化す。学生新聞とはいえ、質・量ともに地域コミュニティからも高い評価を受けている。

### 3 研究成果の発表・報告

研究成果はいくつかに分けて発表していくことになる。焦点を当てたジャーナリズム教育にしても、調査ジャーナリズムにしても、在外研究機関で終わるはずもなく、それら自体が進化、発展していくのは言うまでもない。したがって、在外期間中に吸収したもの

は、これらの研究テーマの土台とはなるものの、終わりではない。

帰国後に最初の成果発表の機会となったのは、2019年7月9日～11日までの間、フランスのパリで開かれた、第5回 World Journalism Education Congress (WJEC) でのセッションだった。英文論文を投稿し、査読を経て採択された。発表のタイトルは、日本の大学・大学院におけるジャーナリズム教育となっているが、カナダ、特に1年間観察し続けたRSJの教育プログラムと比較しつつ、日本側が抱える課題は何かを報告し、セッションの報告者ならびに一般参加者との間で意見交換するという貴重な機会を得た。

フェイクニュースとファクトチェックなど、デジタル時代のジャーナリズムが直面する課題にどう取り組むか、言論の自由を守るために個々のジャーナリストはどう動けばよいのか、そしてジャーナリズム教育はどうあればよいのか。重要なテーマが提示される国際学会で、開催地のフランスだけでなくヨーロッパ各国、中東・アフリカ諸国からも多くの研究者が集った機会となった。しかしながら、日本からの参加者（報告者）は小職を含め2人とどまった。国内の主要学会である日本マス・コミュニケーション学会からも、残念ながら他に参加者はいなかった。日本の研究者の関心は薄いと言わざるを得ない。

そのような条件下で、1人の日本人研究者として報告できたことは、小職にとっても研究を前進させる大きなステップとなったと言える。やはり国内にとどまるのではなく、できるだけ国際レベルで切磋琢磨すべきであると痛感した。パリの3日間はおおいに刺激になった。

#### 4 研究成果の反映

日本の大学・大学院では、ジャーナリストを養成するためのジャーナリズム教育が定着しなかったと言われている。（この点は前記3のWJECでも報告した。）さまざまな議論がある中、小職に課せられた使命は、カナダの大学で行われているジャーナリズム教育を、日本国内の大学で、とりわけ本学でいかに応用するかを探り、できるところから実践することだろうと考えている。

小職は帰国直後にスタートした2018年度の担当科目のうち、3回生が受講するゼミ（メディア学実習Ⅰ・Ⅱ）の内容を、在外研究前の2016年度に比べ、大幅に変更した。具体的には「ジャーナリストを目指す者が集う、超実践的プログラム」をうたい、ニュース記事に書き方、取材と編集の方法などをワークショップで行った後、実践的なトレーニングに移るというRSJのプログラムのエッセンスをふんだんに取り入れた内容を進めている。

受講生は20人。1週間に1コマ90分で、このようなプログラムを組むことは不可能であるため、受講生には、授業コマ（水2）の後、昼休み～3限～4限と、他の科目を履修しないようにしてもらい、実質連続3コマで運用している。

あまりに簡単なことのように見えてしまうかもしれないが、複数のコマを連結させた時間枠を確保するというのは、RSJの教育プログラムの前提と言ってもよい。これによって、学外に取材に行くことも可能となるし、外部からゲストを呼ぶことも容易になる。

授業運営の時間枠に限らず、さまざまなことをこのクラスには取り入れて、実践している。映像作品の制作にも、小職自身、大学のクラスでは初めて取り入れた。実際に動画を（スマートフォンで！）撮影し、編集して、作品を作る。テレビ局が制作して放送している番組に限りなく近づけることを、受講生の目標と定めた。受講生が制作した作品はYouTube にアップした。

映像制作は3回生ゼミだけでなく、1回生向けの半期科目「メディア学実習」でも行っている。そのための機材（三脚や、光を反射させるレフ板、マイクなど）は、実習費で買いそろえた。RSJ がそろえる機材からすれば、おそらく何十分の1に過ぎないが、自分のクラスの受講生分は最低限取りそろえ、実践的なプログラムに取り組めるような環境整備を整えている。

2019年夏は、一部の学生が都心で、東京五輪のテストイベントに参加した。五輪専門サイト「Around The Rings Japan」の記者として、プレスカードを申請し、取得し、国内外の大手メディアの記者やカメラマンと肩を並べて、試合や選手の取材に当たり、記事を書いた。こうした実践を通してこそ、プロのジャーナリストに近づけると確信しているからである。

カナダのジャーナリズム教育を日本で応用するという、在外研究明けの挑戦は始まったばかりだ。

## 5 おわりに

カナダ・トロントでは、本当に充実した、120%の1年間を送ることができました。現地では同志社トロント会の方々にもお世話になりました。社会学部の同僚の先生方、そしていつも支援していただいている職員のみなさまをはじめ、本学のスタッフみなさまに心より御礼申し上げます。研究・教育に対する情熱を含め、現地で得たものを本学の研究と教育に還元することをお誓い申し上げます。

以上